

持続可能性音声教育を目指す ピアモニタリング活動の可能性 —対話を媒介とした言語生態の保全・育成を通して—

房 賢嬉

学位取得年月：平成 23 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】言語生態学、対話、ピア・モニタリング活動、持続可能性音声教育

【要旨】

本研究では言語生態学 (Haugen1972、岡崎 2008) に基づき、言語が使われる環境 (言語生態環境) における学習者の認知過程 (心理的領域) と教室活動 (社会的領域) に「対話」を取り入れることで言語がうまく機能する状況を作り出し、それらの相互交渉を通して言語保全 (発音学習を支える言語をうまく機能させること) を図る「持続可能性音声教育モデル」を提案した。日本在住の韓国人中級日本語学習者 16 名に、自己内対話と学習者間の対話を基本とする「ピア・モニタリング活動」を行い、学習者が自分の問題を考え、その問題を解決するための手立てを講じる過程を自分のものにし、教室を離れても持続的に発音学習を続けていく力の育成が可能であるかを検討した。

まず研究 1 では、自己内対話を促すツールとして導入した発音学習日記をデータとして、日記の中で言葉がどのように機能し、認知を支えているかを記述・分析した。その結果、学習者は自分自身の発音上の問題を解決するために、自分の持っている既存能力のネットワークを活用し、自分とつながっている人やモノ、コトに働きかけながら自分なりの発音基準を作り上げていることが分かった。続く研究 2 では、学習者が一人学習の際に書いた日記と、教室内のピア活動におけるやりとりの関係を検討した。学習者が一人学習の際に得た知見がやりとりの中でどのように機能し、認知や人間関係を支えているかについて分析した。その結果、教室外の一人学習で得た言葉は、教室内のやりとりにおける学習者の認知活動を支え (心理的領域から社会的領域への影響)、教室のやりとりもまた学習者の認知活動を支えることで、発音基準をより精緻化していること (社会的領域から心理的領域への影響) が明らかになった。次に、研究 3 では、心理的領域と社会的領域において言語がうまく機能することで、学習者が人間リソースとなって仲間を支えることが可能かを検討した。学習者が仲間を支える際の言葉の特徴を分析した結果、日本語の音韻体系と自分たちの既存知識との間に共通点を見出し、学習者なりの発音基準を構築していることが分かった。そうすることで、既存知識と日本語の音声知識との間に内的な一貫性を作り出し、そのことが仲間の理解を助けていることが示された。また、これらの作業を背後で支えていたのは、学習者の既存諸能力のネットワークであることが示された。研究 4 では、言語使用のあり方によって人の認識も変わるという視点 (岡崎 2009) に着目し、学習者が持続的に発音学習を続ける力を自分のものにしていくプロセスを縦断的に観察した。学習者は活動への参加を通して、次第に発音基準の言語化の仕方だけでなく、活動への参加の仕方をも身につけていく過程が見られた。

以上の結果から、言語生態環境の心理的領域と社会的領域に「対話」を取り入れることで、日本語音声教育における学習者の言語生態が保全されたといえる。また、そのことを通して学習者の既存能力をベースに日本語の音声を自分のものに取り込んでいくことや自分の発音過程を持続的にコントロールしていく力を育成することが可能であったと言える。

(ばん ひょんひ)